

第1章 研究史と都市エリート

第1節 都市史研究とミドルクラス(Middle Class)

戦後日本の近代イギリス史研究は、世界で最初の工業国家から典型的衰退国家へとそのイメージの転換を行なっている。また、1970年代以降歴史学に大きく貢献すると考えられた社会史や都市史もその問題点が噴出している。しかし、都市史研究は、際限のない細分化に寄与するという問題点を含むが、他方、都市という固有の場で示される社会史的現象に広がりをもつ可能性を提示している¹。なかでも近世・近代におけるミドルクラス研究の活発化は、近代都市史の動向を語る上で重要な問題を提示してくれる。では、何故ミドルクラス研究が活発化したのか。その背景には、産業革命の見直し論、言語論的展開、

18世紀イギリス歴史像の再検討という研究史の動向と密接に関連している。これらの研究史は、いずれも今後の近代イギリスの歴史像を構築していく上で重要な論点となる。例えば、産業革命の見直しと関連するジェントルマン資本主義という刺激的な史観に対してドントン(M.J. Daunton)はミドルクラスと密接な関わりをもつ19世紀のヴォランティアソサエティ(Voluntary Society)の重要性を国家的規模から指摘している²。また、18世紀のイギリス社会を貴族 - 平民の関係で捉えるトムソン(E.P. Thompson)等の研究に対して、貴族 - 平民の間に存在する中間階層の人々(Middling Sort of People)の重要性を指摘するバリー(J. Barry)等の研究もある³。さらに重要な点はミドルクラスの研究が、わが国でも大きな論点となっている近代社会の転換に対して一定の議論を提供することである。代表的な著書を有する柴田は、クラス(class、階級)という歴史的に形成された関係と国家の転換から、近代社会のダイナミクスを説明している⁴。ミドルクラス研究は18世紀イギリス社会を再検討しながら、クラスを中心とした19世紀イギリス社会への転換という議論を行なう素地を提供しており、この点は柴田等の議論に対しても密接な関わりをもつ。そこで本稿では、クラスを共通の経験を通じて形成される歴史的概念であり、共通の利害やその対立によって形成される紐帯、つまり、社会関係を示す言語であることを前提にして⁵、近代イギリス社会の転換を個別都市のミドルクラスの動向に絞った上で分析を行なう。

...

¹ 日本における批判的動向として、川北稔「『残余の要因』から『全体史』へ」川北稔・竹岡敬温編『社会史への途』有斐閣、1995年。有益な紹介として、長谷川貴彦「階級・文化・言語-近代イギリス都市社会史研究から」『思想』828、1993年。R.J. Morris and Richard Rodger (eds.), *The Victorian City: a Reader in British Urban History, 1820-1914* (London, 1993); Jonathan Barry (ed.), *The Tudor and Stuart Town: a Reader in English Urban History, 1530-1688* (London, 1990); Peter Borsay (ed.), *The Eighteenth Century Town: a Reader in English Urban History, 1530-1688* (London, 1990)はそれぞれ有益な研究史を提供してくれる。

² M.J. Daunton, 'The Entrepreneurial State, 1700-1914', *History Today*, 44 (1994), pp. 14-16; idem, *Progress and Poverty: an Economic and Social History of Britain, 1700-1850* (Oxford, 1995), p. 562. ミドルクラスの背景説明として、Dror Wahrman, 'National Society and Communal Culture: an Argument about the Recent Historiography of Eighteenth-Century Britain', *Social History*, 17(1992); idem, *Imaging the Middle Class: the Political Representation of Class in Britain, c. 1780-1840* (Cambridge, 1995), pp. 1-18.

³ Jonathan Barry and Christopher Brooks (eds.) *The Middling Sort of People: Culture, Society and Politics in England, 1550-1800* (London, 1994), pp. 1-27. 中間階層研究の欠如に対するトムソンの返答は、E.P. Thompson, *Customs in Common: Studies in Traditional Popular Culture* (London, 1991), pp. 87-96. トムソン自身は、自らの中間階層分析の欠如は認めているが、この階層の存在を無視していないことを主張している。その点、彼の枠組を批判したバリーの論点は問題がある。Wahrman, *Imaging*, pp. 3-4 を参照せよ。トムソンの「貴族 - 平民」の枠組は E.P. Thompson, 'Eighteenth-century English Society: Class Struggle without Class?', *Social History*, 3 (1978); Thompson, *Customs* を見よ。

⁴ 柴田三千雄『近代世界と民衆運動』岩波書店、1983年、20-38, 95-99, 235-308頁。尚、本書で柴田は前述した論点以外に資本主義的世界体制という重要な指摘をしているが、本論稿ではこの点は検討しない。

⁵ 柴田『近代世界』20-38, 95-99, 240-241, 269-309, 419-420頁。階級概念については、E.P. Thompson, *The Making of the English Working Class*, Penguin ed. (London, 1980), pp. 8-13, 887-915 がまず参照されるべきである。R.S. Neale, *Class in English History, 1680-1850* (Oxford, 1981)も参照。尚、本稿でミドルクラスの形成という場合、あくまで社会関係の歴史的形成ということさをさし(その中に新しい理念、新しい社会集団が含まれることもあるが)新たな社会的階層の勃興という意味ではない。John Seed, 'From "Middling Sort" to Middle Class in Late Eighteenth- and Early Nineteenth-century England', in M.L. Bush (ed.), *Social Orders and Social Classes in Europe since 1500: Studies in Social Stratification* (London, 1992), pp. 124-129. また、トムソンとは異なる観点として、18世紀までの垂直的支配形態(階級無き社会)から階級対立を中心とした19世紀イギリス社会への移行を示したパーキンの議論も参照すべきである。Harold Perkin, *Origins of Modern English Society* (London, 1969), pp. 17-62, 218-270.